

## 113 誌上発表

## 足利学校遺蹟図書館所蔵の医薬書

野澤 隆幸, 小曾戸 洋, 花輪 壽彦

北里大学東洋医学総合研究所

足利学校は上杉憲実(1410~66)が再興したとされる室町時代以来の学問施設で、関東における漢学の殿堂として、江戸時代を通じ、学術の振興に寄与した。かの曲直瀬道三も享禄元年(1528)に京より赴いて足利学校で経史諸子の書を学んだと伝え、室町末期にはすでに足利学校において『黄帝内経素問』の講義が行われていたことを示す資料も伝存している。

足利学校における蔵書集散の様相は複雑であるが、長年の過程を経て、明治36年(1903)には足利学校遺蹟図書館(町立のち市立)が開設され、今日に及んでいる。このたび『足利学校遺蹟図書館分類目録』(長沢規矩也編・1966足利学校遺蹟図書館後援会発行)を手引きに、同図書館に所蔵される医薬書について調査したので報告する。

『足利学校遺蹟図書館古書類目録』の医家類には、「医経」として『新刊黄帝内経霊枢』6冊・『難経本義』2冊。「方論」として『傷寒論』1冊・『同』1冊・『同』1冊・『同』1冊・『金匱要略』1冊・『同』1冊・『同』1冊・『類証弁異全九集』2冊。「本草」として『重修政和経史証類備用本草』10冊・『本草綱目』40冊。以上の計12書67冊が著録されている。

実見の結果、とくに注目に値するのは『重修政和経史証類備用本草』10冊の1点であった。同書は嘉靖16年(1537)楚府の崇本書院において刊行された明刊本で、末冊尾に「嘉靖丁酉孟春月吉／楚府崇本書院重刊」の蓮台木記があり、その直前に「……己酉中秋雲中劉祁云、大徳丙午歳仲冬望日平水許宅印」の元刊記が重刻されている。この嘉靖16年刊『政和本草』の伝本は稀で、演者らは他に武田科学振興財団杏雨書屋にその存在を知るのみである(杏雨の貴566に揃本、貴580に残欠本があり、照合の結果、同版本であることを認めた)。各冊に「乗附文庫」「蓮岱会寄附」の印がある。当該本は足利学校旧伝の書とされる。

明版『重修政和経史証類備用本草』を除き、目録に載せられた医薬書はすべて和刻本であった。すなわち『新刊黄帝内経霊枢』は寛文三年(1663)吉弘玄仍の付訓による24巻本。『難経本義』は寛文頃の刊、出雲寺和泉掾の刊記のある後印本で、明吳中珩の校刊本に拠るもの。『傷寒論』4点は、いわゆる小刻本(正徳5年あるいは享和元年)と天保元年の仮名振本。『金匱要略』3点も同じく小刻本(天明8年・文化3年)である。『類証弁異全九集』は田沢仲舒が校刊した文政元年(1818)の木活字版(足利学校伝来本という)。『本草綱目』は武林銭衙本に基づく寛文12年(1672)のいわゆる貝原益軒本。阿由葉鍋造の旧蔵にかかる新収本である。

以上、足利学校遺蹟図書館の所蔵する医薬書について検討した。結論は次のようである。

貴重書に属するのは明嘉靖16年刊『重修政和経史証類備用本草』30巻10冊であり、同版本は国内では武田科学振興財団杏雨書屋に所蔵があるのみである。

残りの11書はみな江戸時代の日本刊本で、古いものは寛文3年、新しいものは文政元年の版。江戸前期から後期にわたるが、とりたてて稀少本と称すべきものはない。